

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25780460

研究課題名(和文) 保育者の保育観と子どもらしさ・かわいさイメージの関連性に関する研究

研究課題名(英文) the relevance of childcare workers' perspectives on childcare and images of children and cuteness

研究代表者

武内 裕明(Hiroaki, Takeuchi)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：50583019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、保育者の実践を規定する保育観と子どもらしさ・かわいさイメージの関連性を明らかにすることである。本研究を通じて、(1)保育実習等を通じてかわいいものがふさわしいという発想が経験的に強化されること、(2)子どもがかわいいものが好きであるという平均的な子ども理解や、保育の場が安心して楽しいものであるというイメージがかわいいものの使用と関連していること、(3)保育者は製作の際に教育的側面からではなく、保育雑誌や製作参考書を参考に保育者自身の好みによってかわいいものを選択していること、が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the relevance of perspectives on childcare and images of children and cuteness in defining childcare workers' practices. This study reveals the following. First, trainee childcare workers believe that cute things are appropriate for child use through practice teaching. Second, childcare workers believe that the average child likes cute things, and that childcare settings must be fun and safe, which are similar in effect to cute things. Third, childcare workers select cute things according to their own taste, not through an educational perspective, based on childcare magazines and product reference books.

研究分野：幼児教育学

キーワード：かわいいもの 保育者 保育観 子ども観 製作参考書

1. 研究開始当初の背景

日本の幼児教育・保育実践においては、研究者等の教員養成側の見解と実践者側の見解の間に大きな断絶があることが指摘されている。保育者側の養成教育の全否定ともいえる知識の軽視をふまえれば、この種の指摘の背景には、研究者側の科学性や理論を基盤とした子ども観と、実践者側の生活実感に基づいた子ども観の間のずれがあると考えられる。

そのような断絶のひとつに、日本の現在の保育を特徴づける傾向であるかわいいものの使用がある。現在では保育者による壁面製作や工作物などにおいて、カラフルでキャラクター化された動物や物などを題材にした「かわいい」と評されるイラスト等がしばしば用いられている。また、製作活動などにおいても、無生物に対して顔を描かせるなどの指導が何の疑いもなく行われ、キャラクター化されたかわいいデザインは子どもにふさわしいものであると、しばしば自明視されている。さらに、保育関連書籍に目を向ければ、保育雑誌や製作参考書にはかわいいイラストが頻繁に登場し、売り場ではたくさんのかわいいキャラクターが保育関連書籍の表紙を飾っていることが確認できる。結果として、日本の保育の場は、家庭とも小学校以降とも異なる、カラフルでかわいいキャラクターにあふれた独特の空間を構成するに至っている。

しかし、多くの保育の場が実際にかわいいものに囲まれているとしても、なぜ子ども達にかわいいものを提供するのかに関しての十分な理論的な裏付けは存在しない。それは、この特徴は理論からではなく、実践者側の指向から形成されたためである。そのため、かわいいものの使用の教育的意義は不明確な状態である。また、保育者たちがかわいいものを選択する背景について積極的に言及することは、それがあまりに自明なためかほとんどない。一方で、絵本関係者の一部からは、機関誌等においてかわいいイラストの使用による子どもへの悪影響を危惧する見解が表明されている。そのような議論では、大人の興味を引くための商業的な手段としてのイラストのかわいさが、よい絵本の選択を妨げるものとして批判されるとともに、大人が「子どもがかわいいからかわいいものを用いる」のだとして、かわいいものが選ばれる理由が説明されている。

本研究でも当初、女性中心の特殊な集団である保育者集団には特有の子ども観や保育観が存在し、それがかわいいものの使用を規定していると予測して、それらの関連性を明らかにすることを構想した。これは、かわいいというイメージの共通性を基盤として、子どもや保育がかわいいものとのつながる結果、かわいいものが用いられるのではないかと考えたためである。そのため、本研究ではかわいいものを保育者が用いるメカニズムの

解明に重点を置くこととした。

かわいいものがどのような理由で用いられるかの検討を進めることは、このように考えれば単にかわいいものの使用理由の特定に留まらず、保育者特有の保育観を明らかにする一端となる広がりのある内容である。また、保育を志望する学生たちから一貫する独自の傾向が明らかにできれば、保育実践の傾向の予測ができ、その結果から別の価値観をもつスタッフの保育への参加の必要性などを根拠づけることができる等、保育実践の発展的展開に寄与できる。以上のような背景から本研究を構想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育者の実践を規定する保育観と子どもらしさ・かわいさイメージの関連性を、保育者及び保育者養成課程の学生へのインタビューによる質的検討及び製作参考書の分析を通じて明らかにすることである。とりわけ本研究では、保育者や保育者養成課程の学生がかわいいものを保育の場で使用するのとはなぜなのか、という点に焦点化した検討を行う。

保育者養成の段階からのかわいいものの使用を規定する要因を明らかにし、保育実践でなぜ保育者がかわいいものがしばしば用いられるのかを検討することは、保育の独特な環境を規定する発想法を明らかにし、保育のさらなる改善に資する基礎的な知見を提供することにつながる。

3. 研究の方法

本研究は、主に3つの方法によって遂行された。その中心となるのは、保育者の思考をアクチュアルに把握して研究目的の達成をめざす、インタビュー調査を用いた質的な検討であり、(1) 保育者養成課程の学生の保育観と子どもらしさ・かわいさイメージの関連性の検討、(2) 保育者養成課程の学生の保育観と子どもらしさ・かわいさイメージの関連性の検討、の2つからなる。インタビュー時間は保育者養成課程の学生に対しては一人あたりおよそ90分、保育者に対しては一人あたりおよそ30分であった。保育者養成課程の学生に関しては、一貫した傾向が存在するかを確認するために、入学後の影響の少ない1年生へのインタビューを行うとともに、実習の影響などを把握するために幼稚園教育実習に参加した学生に対するインタビューを行った。保育者に対するインタビュー時間は協力を得るために短くならざるをえなかったが、質問内容を精選し、要点を効率的に聞くことで必要な情報の収集に努めた。

また、インタビュー調査の結果、保育者養成課程の学生、保育者双方共に保育雑誌や製作参考書を参照していることが明らかになってきた。そのため、保育者たちの選択を規定する背景の明確化をめざして、(3) かわいいをキーワードとするタイトルをもつ販

売中の製作参考書を収集し、その内容を分析することで、保育の場がかわいく飾られる背景の検討を行なった。

4. 研究成果

本研究の研究成果は以下のように整理できる。

まず、先行研究での指摘とは異なり、子どもがかわいいからかわいいものを用いているわけではないという点が明らかになった。先行研究では、かわいいという言葉でくくれることを手掛かりとしたためか、子どもがかわいい存在であることがかわいいものを用いる理由として挙げられがちであった。本研究においても、調査対象者の大半は子どもがかわいいものがふさわしいと考えていた。しかし、今回の調査では保育者養成課程の学生、保育者のいずれからも、子どもをかわいいと認識することと、子どもにはかわいいものがふさわしいとみなすことを結びつけた言及はみられなかった。調査対象者の多くは確かに子どもをかわいいとも感じていたが、これは保育でかわいいものが用いられる主要な理由とはなっていない。また、子どもらしさのような理想像としての子どもの姿も、かわいいものの使用との関連が薄かった。子どもに対してのかわいいという認識と、かわいいものが子どもにふさわしいという認識が独立していることが確認できた点は、本研究から得られる重要な知見である。

かわいいものを用いる理由に関しては、保育者養成段階と実際の保育者では差が見られた。しかし、養成段階での希望進路の不確実性や複数性、かわいいものの使用に対する個人の見解の差の大きさから、保育者を志望する集団を、研究当初の予測のように特殊性をもつ同質性の高い集団として一律に論じることは困難であった。また、保育者に関しても、かわいいものを積極的に評価する者と、少数ではあるがかわいいものの使用に抵抗をもつ者に分かれていた。

保育者養成課程の1年生と幼稚園教育実習生に対するインタビューの結果からは、かわいいものを用いるのがふさわしいという発想は、1年生よりも幼稚園教育実習生で強いことが示唆された。この発想は、実習で子どもがかわいいものを提示された時の「かわいい」といった反応や、一斉活動での製作物の選定や壁面製作などの実習での必要性に基づいて保育雑誌や製作参考書を参照することによって強化される傾向にあった。保育者養成課程の学生は、帰納的に強化された子どもがかわいいものが好きであるという考えを前提に、かわいいものを用いることを主に教育的見地から説明した。保育者養成課程の学生たちは、季節感を感じさせるための手段として、あるいは一斉活動等の子どもが全員参加する必要のある活動において子どもに興味をもってもらうための手段として、子どもの好きなものとして想定できるかわいい

ものを用いると考えていた。保育者養成課程の学生にとって、子どもがかわいいものに興味をもたないというケースは、理論的には存在するが、実在するとは信じがたい想定外のものとみなされていた。

実習生が教育的見地を重視したとすれば、保育者側はかわいいものを用いるという部分に関しては教育的な見解をもたなかった点が特徴的である。保育者に実際の壁面製作のプロセスを尋ねることで明らかになったのは、保育者の壁面デザインの決定に際しては、主に保育者自身の好み、子どもの製作物の適切性、製作の簡単さの3点が基準となっていることである。この基準を視点とするなら、子どもに適切な制作物を考慮する点は教育的見地と関連するにしても、デザインを決定しているのは保育者の好みという個人の感性に依拠したものである。また、デザインの決定に際しては、製作する立場にある保育者は調査の範囲では全員保育雑誌や製作参考書を参考にしており、それらが大きな影響を与えていることが示唆された。先行研究同様にキャラクターの使用等に積極的でない保育者も存在したが、そのような保育者は既存のかわいいものに囲まれた保育の場や子どもにかわいいものがふさわしいというイメージに対しても懐疑的であった。また、子どもが作ったものや、子どもの動きや子どもの製作物などにかわいさを感じる等、キャラクター的表現ではない側面にかわいさを感じている場合にも、かわいいものに対する評価は抑制される傾向にあった。

保育者は、保育者養成課程の学生以上に個々の子どもの好みが多様であることを理解しており、かわいいものに興味をもたない子どもが存在することを、実例から把握していた。そのため、子どもはかわいいものが好きであるといった安易な断定はしない傾向にあった。しかし、このような個別の子ども理解とは別に、保育者は平均的な子どもイメージももち合わせており、多数の子どもに当てはまる平均的な子ども理解に基づいて子どもはかわいいものが好きな場合が多いと判断していた。そのため、保育者も実際にはかわいいものを用いることを自明視している場合が多かった。

保育者の保育観との関連では、かわいいものがもたらすと考えている効用と保育の場のあるべきイメージに関しての類似が認められた。保育者たちはかわいいものが子どもに安心感を与え、楽しい気持ちにさせると考えていた。また、保育の場が子ども達にとって楽しく過ごせる場であることや、安心感を与えることは、保育者が幼児理解と並んで最も重要視している内容であった。とりわけ、安心感に関しては、年少の保育室や玄関、殺風景に思える場所などの装飾に関して言及されることが多い。安心感の特に求められる場所にかわいいキャラクターが重点的に配置されることから、両者には対応関係がある

ことが認められる。

保育者や保育者養成課程の学生のインタビュー結果から、保育雑誌や製作参考書がかわいいものの使用に大きく影響していることが示唆された。そのため、タイトルにかわいい等の言葉を含んでおりイラスト等にかわいさを見出していることが明らかであるとともに、現在販売されており入手可能な製作参考書を対象として検討を行った。製作参考書の主要な特徴は、製作を得意としない保育者の技術的な問題に対応する実用性にある。現状では壁面製作や子どもの製作物の計画などがほぼ必須の業務と化しているため、製作参考書は保育者がそれらを得意としないほどに大きな影響力をもつ。資料の検討の結果、製作参考書でもかわいいことの重要性はほぼ説明されていなかった。言及のあった製作参考書では、明るく楽しい雰囲気や緊張や不安を和らげる等の保育の場の理想的イメージと関連した言及が見られるとともに、保育者の壁面製作が楽しくなる等の保育者側の需要についても語られていた。

また、著者のほとんどが保育者としての専門性をもたない保育分野を専門とした商業イラストレーターやデザイナーであったことも特筆に値する。著者のなかには保育の実務経験のある者は少なく、大学等で児童文化を専攻した経歴であってもプロフィールに記載されるほどの特記事項となっていた。基本的にはデザイン事務所勤務やイラストレーターとして経歴をスタートさせた者が保育関係のイラストやデザインを手掛けることで、保育分野のイラストレーター等になっている。これらの専門分化した保育分野のイラストレーター等は、かわいく装飾された場所としての保育の場のイメージから、かわいいキャラクターのデザイン見本を多数提供している。また、保育者の需要をうかがわせる言及の存在は、かわいいキャラクターが保育者に受けの良い売れ筋の本であることを示唆している。保育の非専門家による保育の場のイメージに基づいた商業的な作品という位置づけのために、かわいさを売りにする製作参考書は教育という発想に乏しく、大人が好みそうなかわいいものを無批判に提供する結果となっていた。すなわち、製作参考書におけるかわいさは、教育的意図を含まない単純な装飾的性格に由来している。

以上のように、保育の場にかわいいものが用いられる背景には、保育の場で用いられるものを装飾とみなすか、教育の手段とみなすかという対立軸が存在している。研究者のような理論を重視する側がかわいいものの教育的価値に重きを置けば、その使用の必然性はあいまいに映る。一方で、実践者やイラストレーターらは大人も子どもも楽しめる装飾としてかわいいものを理解しているため、子どもへの影響についての考察を経ないまま、かわいいデザインは保育の場に重要な役割を果たすとみなしている。

これらの知見をふまれば、保育実践とデザインの双方の観点を兼ね備えた空間利用を考えていく必要があるといえる。とりわけ教育的な空間としての保育の場の可能性は十分に追究されているとはいえない。そのため、保育の場の教育的な空間デザインにはどのような可能性があるのかを、これまでの実践をふまえて検討していくことが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

武内裕明「保育におけるかわいいものの選択理由 - 保育者へのインタビューを通じて - 」『弘前大学教育学部紀要』第113号、査読無、2015、pp.105-114

武内裕明「保育の場がかわいく飾られる背景の検討 - 製作参考書の分析から - 」中国四国教育学会『教育学研究紀要(CD-ROM版)』第60巻、査読無、2015、pp.398-403

武内裕明「幼稚園の実習生は何を手掛かりに保育を構想するのか - ぶどうに目をつけた製作場面に関するインタビューから - 」『弘前大学教育学部紀要』第111号、査読無、2014、pp.121-128

武内裕明「幼稚園教育実習生の保育観 - 子どもらしさ・かわいさイメージを視点として - 」中国四国教育学会『教育学研究紀要(CD-ROM版)』第59巻、査読無、2014、pp.175-180

[学会発表](計3件)

武内裕明「保育の場がかわいく飾られる背景の検討 - 製作参考書の分析から - 」中国四国教育学会第66回大会(2014年11月16日、広島大学)

武内裕明「保育者志望学生の保育観 - 子どもらしさ・かわいさイメージに着目して - 」日本乳幼児教育学会第23回大会(2013年11月23日、千葉大学)

武内裕明「幼稚園教育実習生の保育観 - 子どもらしさ・かわいさイメージを視点として - 」中国四国教育学会第65回大会(2013年11月2日、高知工科大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

武内 裕明 (TAKEUCHI HIROAKI)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：50583019